2月29日（Fri）　Berlin - 1

【巡検プログラム】

8：40　ホテル出発
8：45　市電乗車
　Hohenschön hausen/ WeißenSeerWeg駅《M13番or15番》
　→Lamdsberger A 駅《M5番》→アレクサンダー広場駅Alexander-Platz
9：10　アレクサンダー広場Alexander-Platz
9：40　本屋
9：50　市庁舎Rotes Rathaus見学
10：00　ニコライ地区Nikolairche見学
10：15　旧共和国神殿Palaster der Repulik跡地見学
10：45　ノイエ・ヴァッヘNeue Wache
11：00　フンボルト大学FumboldtUniversität
11：15　ベーベル広場bebelplatz（焚書跡）
11：40　ブランデンブルク門Brandenburger Tor、見学、記念撮影
12：00　ホロコーストモニュメント見学
12：15　ポツダム広場Potsdamer Platz見学
13：45　ダイムラー地区にて、昼食
14：05　ヒトラー総統官邸Reichskanzlei,//総統地下壕Führerbunker跡見学
14：20　財務省（旧航空省）／　６月１７日(ベルリン蜂起)のモニュメント
14：45　ベルリン壁跡、野外展示場（テロのトポグラフィーTopography of Terror）
16：20　チェックポイント・チャーリーHaus am Checkpoint Charlie
16：45　アンハルト駅Anhalter駅《S２番》→ポツダム広場駅Potsdamer Platz《U５番》
　→ヴィッテンベルグ駅Wittenbergplatz
17：15　ヴィッテンベルグ駅Wittenbergplatz
17：30　カイザーヴィルヘルム教会Kaiser-Wilhelm-Gedächtniskirche
17：40　デパート、KARFUR
　　～自由行動
18：45　KARFUR集合
18：50　Kurfürstendamm駅《U９番》→HansaPlatze駅
19：15　Tier garten駅《S75番》→ZoologischerGarten駅
20：30　夕食　RESTAURANT　“BAVARIUM”
21：41　ZoologischerGarten駅《S75番》→アレクサンダー駅

【主な巡検ルート】

【巡検内容】

① アレクサンダー広場

市電の駅を降りるとまず目に付いたのがテレビ塔であった。残念ながらその機会はなかったが、展望台まで上がれば東ベルリンの町並みを一望できるようだ。東西分裂時、国営ホテルと並んで社会主義的プロパガンダとして建てられたというだけあって、その姿は広場内の何よりも一際目立っていた。その反面、他の建物とは明らかに一線を画した風貌に若干違和感を覚えたが。

旧東ベルリンの中心市街であったというこの広場は、現在ベルリンの副都心となるべく、大改修の真只中であった。上述の国営ホテルやテレビ塔といった社会主義的プロパガンダを活かしつつも、広場のところどころに工事の手が及んでおり、最終的には①建物を敷き詰め、②色をきれいに、③高層化といったものを目指していくようである。正直な感想としては、「いったい完成はいつの話になるのやら・・・」というところであった。これはこの広場だけではなく旧東ベルリン全体を周って思ったことだが、それほど途方もないくらい大規模に都市を変貌させようとしているのが見て取れた。

テレビ塔

旧国営ホテル

改修中の広場の一角

現在、広場の名物の一つとなっている世界時計

② ニコライ地区

1230年頃に建てられたという、ベルリンで最も古い教会があるこの地区は、1945年に戦火に見舞われ破壊された。そしてそのまま瓦礫の状態が35年以上も続き、再建されたのは1981年からだったという。再建の作業は1987年までかかり、その後は古い街並み・街路がここだけ残っているということもあり、観光用地として親しまれている。下に載せた写真で伝わるかは分からないが、明らかに“観光用”という感じが出すぎていてどこかテーマパークのような感じを受けた。

また、この地区の近くには通称「赤い市庁舎」と呼ばれるベルリン市庁舎がある。1864年に建てられた煉瓦造りの建物であり、社会主義の“赤”と煉瓦の赤をかけ合わせたのがその由来という話である。1990年の東西統一後、ベルリン市長はここで執務をとっている。

ニコライ教会

ニコライ地区の町並み

ベルリン市庁舎

③　共和国宮殿

　かつての選帝侯フリードリヒ二世によって基礎が築かれ、1700年に落成されたこの王宮は、第二次大戦終戦後に1度東ベルリン当局に爆破された。しかしながらその後迎賓館としてとして1973年から3年かけて再建された。壁の崩壊後は文化的な目的のために使用することを考えられたが、再建時の建築材に含まれていたアスベストのために2006年から解体が決定し、現在はその作業の真最中であった。ただし、ベルリン市議会では本宮殿の再建が決定しており、これは現ドイツ首相のメルケルも賛成しているとのことである。

　莫大な資金が必要となることがわかっていながら再建が議会で通されるあたり、本宮殿がベルリンにとって要地となっていることがうかがえる。

　完成がいつになるかはわからないが、是非とも再建された後にもう1度訪れたいと思う。

解体中の共和国宮殿

④　ノイエ・ヴァッヘ

「新衛兵所」、あるいは「新哨舎」と訳される。1816年にプロイセン王フリードリヒ・ヴィルヘルム3世が建築家カール・フリードリッヒ・シンケルに衛兵所として設計させたものであるが、1930年代に第1次世界大戦で戦没した兵士の霊廟とされた。そして東ドイツ当局によって「ファシズムと軍国主義の犠牲者の慰霊所」とされ、強制収容所の囚人と無名戦士のために永遠の火がともされた。1993年にはドイツ連邦共和国の「強制収容所で死んだ者への慰霊センター」と奉納され、今に続いている。

　また1993年以降はドイツ連邦政府の「戦争と暴力支配の犠牲者のための国立中央追悼施設」（Neue Wache als zentrale Gedenkstätte der Bundesrepublik Deutschland für die Opfer des Krieges und der Gewaltherrschaft）として改装され、「国民哀悼の日」（11月の第3日曜日）の式典会場になっている。

ノイエ・ヴァッヘ

ケーテ・コルヴィッツの彫刻と献花

⑤　フンボルト大学（ベルリン大学）

　国王フリードリヒ・ヴィルヘルム三世の支援を受けて、1年に教育改革者で言語学者でもあったヴィルヘルム･フォン・フンボルト（アレクサンダー・フォン・フンボルトの兄）によって創設されたベルリンで最も古い大学である。元々は皇太子ハインリヒ（フリードリヒ大王の弟）の宮殿であったという。第二次世界大戦後のベルリン分割時代は東ベルリン側に位置したのでフンボルト大学と改称された。

　日本からも森鴎外・北里柴三郎など、数多くの偉人が本大学に留学している。

ベルリン大学

⑥　ナチスの「焚書事件」

1933年3月10日にナチスに煽動された学生たちが、フンボルト大学からウンター・デン・リンデンをはさんだ向かいにあるベーベル広場の横の図書館の窓から本を投げ捨て、積み上げて火を放った事件。同広場には焚書事件を忘れないようにつくられた「地中の図書館」がある。

事件が起こった広場

地中の図書館

⑦　ブランデンブルク門

ウンター・デン・リンデンの西の端に立つ、プロイセン王国フリードリヒ・ヴィルヘルム二世の命で1791年8月6日に建てられた凱旋門。プロイセン王国の象徴であり、18あったベルリンの城門のうちで第二次世界大戦後唯一残った門でもある。また、東西冷戦の象徴として、東西2つに引き裂かれた分断国家ドイツの悲劇の象徴ともなった。東西ドイツ統一後は、「西と東のヨーロッパを結ぶ門」として脚光を浴びるようになった。

名前の由来は、ベルリンから西に位置するブランデンブルク市への道の起点となっていたことによる。

雄大な風貌に圧倒される一方、ドイツのシンボルとも言えるこの門の周囲に外国大使館が多く見られたのは面白いと思う。

近年、この門の下、すなわちウンター・デン・リンデンの下を通す地下鉄の工事が行われている。

ブランデンブルク門

地下鉄の工事現場

⑧　ホロコースト記念公園

壁があったときは何もなかった空き地を公園として作り変えたもの。数にすると600程の四角く切った石が並べられている。これは600万人ものユダヤ人を殺したホロコーストを思い起こすためのモニュメントとされている。ここで当時の首相、シュレーダーが歴史に残る演説をしたことで有名になった。

観光客も多かったが、聞いた話によるとベルリン市民の憩いの場にもなっているようで、その点は興味深かった。

ホロコースト記念公園

⑨　ポツダム広場

1920年代から30年代にかけて、本広場はヨーロッパ経済の中心地の一つであった。しかし第二次大戦時は、ベルリンの多くの場所と同様に最後の年の激しい空襲と砲撃により建物の多くは破壊された。壊滅したフリードリヒ通りと同じく、ヒトラーの総督府やナチスの秘密警察などが近かったために集中的に標的にされたようである。戦争終結後、占領軍（連合国）によってベルリンは分割され、ポツダム広場はアメリカ軍、イギリス軍、ソビエト軍の占領地域の境界になった。

東西陣営の冷戦の緊張が高まるにつれて東ベルリンと西ベルリンの間の旅行が制限されるようになり、ポツダム広場は行くことができない境界になってしまい、市民にとっての重要性は失われた。1961年8月31日に都市の中をつらぬく境界線に沿ってベルリンの壁が構築され、ポツダム広場は二つに分断された。こうしてかつてのにぎやかな交差点は荒地となってしまった。

しかし東西ドイツ統一後、本広場は、ビジネス・生活・文化・商業の中心となるべく、ダイムラー・ベンツや、ソニー、ABBなどが21世紀に向かう街づくりを手がけた。

今回の巡検の事前学習で自分が調べていたところなので、実際に目にすることができたのは非常に大きな収穫であった。また、ベルリンの壁だけでなくナチスをも観光資源にしていたことは驚きであった。

時計台（左）と観光資源になっているベルリンの壁と東独兵（右）

ソニーセンターの中にあるシネマコンプレックス（左）とその外観（右）

ショッピングモールのようになっているダイムラー地区の内部（左）とポツダム広場の全容図（右）

←ベルリン名物のカレーソーセージ（美味）

⑩　ヒトラー待避壕

1947年にソ連（？）によって爆破された。その後1974年までガレキのままで、現在では周りを住宅に囲まれた駐車場となっている。あまりの殺風景な様に、「本当にここが？」と疑ってしまうほどである。なぜこの地が観光資源として活かされなかったのは疑問が残る。

現在の姿（左）とかつての待避壕の図（右

⑪　旧航空省（現在の財務省）

□航空省

テンペルホーフ空港も手がけたErnst Sagebielによる、典型的なナチス様式の建造物。建物は非常に大きく、石造りで、威圧的である。他のナチス官邸と比べても抜きんでた大きさである。敷地規模だけで、首相官邸と総統官邸を合わせたものの2倍であるという。この建物はゲーリングが率いたかつての航空省であった。官庁などの中枢機能が集中していたヴィルヘルム街の一角をなしていたため、1945年のソ連軍によるベルリン市街戦において集中砲火を浴びる。これによってヴィルヘルム街は壊滅的な被害を受けたのだが、奇跡的にも、この旧航空省だけはほぼ無傷で現在までその姿を残しており、現在は財務省としていまなお機能している。威圧的とはこのことをいうのだろう。

□社会主義の壁画

おそらく社会主義時代は、ナチ時代の建築を壊すのではなく、ソフトを作りかえることで、ナチを否定したのだろう。社会主義を賞賛する壁画はまさにそれを表しているように思われた。いかめしいつくりの元航空省と、華やかに社会主義体制を絶賛する壁画、これらを否定すべきものとして破壊するのではなく、まるで全てを受けとめるかのようにその変遷をそのまま残して現在の財務省が存在している。それは、東西を乗り越えてひとつになろうとする、まさに統合を示した姿であるように思えた。

6月17日モニュメント

□6月17日のモニュメント

旧航空省の傍らにはベルリン暴動を記念したパネルが立ち並んでいる。ベルリン暴動とは1953年６月１７日に鎮圧された、数日間にわたる東ドイツの民衆による反政府運動である。同年３月のソ連社会主義の宗スターリンの死がきっかけに、東独政府が提案した労働ノルマ引き上げをめぐる労働者の不満が火種となって勃発した。当初人びとは「政府の退陣」を要求していたが、さらに「選挙の自由」、「政治犯の釈放」などを要求し、ノルマへの抗議運動から抑圧されていた自由を求める運動へと展開していった。民衆のこうした行動が東独警察の手に負えなくなると政府はソ連に軍事介入を要請し、これに応じたソ連は戦車までも動員して暴動を鎮圧した。結果的に言えばベルリン発の民主化の動きはつぶされてしまうが、この「自由」を求める動きはソ連影響下におかれた各国に伝わり、1956年のハンガリー暴動へとつながっていく。ハンガリー暴動の傷跡は現在に至るまで残されており、後に訪れたハンガリーでは内戦ともいえる当時の暴動の規模の大きさを忍ぶことができた。

パネル自体はそれほど大きいものではないが、いま自分が立っている場所でかつて大きな事件があったのだと認識するには十分であった。一方、すぐ近くの壁には社会主義時代のスローガンをあらわした壁画があり、かつてここが社会主義体制をとっていた国であること思い返される。ベルリンの街には歴史的モニュメントに遭遇する。歩いても常に歴史が意識の傍らにあり、現在と過去が常に交差している場所であるという印象を受けた。

おそらくベルリンの人々にとって誇らしい歴史ではないはずだが、それにも関わらず数多く置かれた歴史的モニュメントは視覚的に記憶に訴えかけている。そして嫌が応にも、まさにこの場所で起こった出来事を意識せざるを得ない。ベルリンでは、かつてあった時代が否定されるのではなく、受け止めてられている。このことは日本との大きな違いではないだろうか。

⑫　テロのトポグラフィーTopography of Terror

旧プリンツ・アルブレヒト通りのゲシュタポ本部や親衛隊(SS)の国家保安本部跡を保存している野外展示場。ほとんど更地だが、発掘された地下監獄や、ゲシュタポの遺構の上に作られたベルリンの壁の一部などが展示されている。

ゲシュタポとはヒムラーによって設置された秘密警察である。「本質的にゲシュタポは警察官であったが、恐怖を植えつけ浸透させることで国家および民衆の操作を行うナチ統治の手先」（p71, J.テーラー/W.ショー『ナチス第三帝国事典』三交社、1993）であった。彼らは秘密裏に国家体制への危険分子を探し出し、尋問を行った。社会主義者や作家、ロマやユダヤ人、さらに彼らと関係を持ちアーリア人種の血を汚そうとする人など徹底的に攻撃された。ベルリンの壁の遺構に設置されたパネルにはナチズムによって犠牲者となった人びとの姿が映し出されている。

かつての壁の緩衝地帯。現在も更地になっている。

犠牲者となった社会主義者たち。ヒトラーの政権掌握直後は、反社会的思想家として社会主義者たちが徹底的に弾圧された。ちなみに、展示内容は東独時代から変わっていないそうだ。

展示パネルにはナチズムの犠牲者の姿を映した写真パネルや、戦時中のベルリンの様子を示す展示などがなされている。写真パネルで目に付いたのは、集団のなかで殺される犠牲者の姿である。集団による暴力。これこそが戦時中にベルリンを支配したみえない力だったのではないだろうか。

もちろん、これはドイツだけの特殊な事例などではない。そう思えばこそ、この無料の野外展示の価値ははかりしれない。

⑬　チェックポイント・チャーリー

かつての東西ベルリンを繋いだ西側の検問所。フリードリヒシュトラーセは鉄道唯一の東西ベルリンの入り口である一方で、ここは地上唯一の検問所であった。ここは外国人と西側占領３カ国の軍人専門で、徒歩あるいは車で越境するときは必ずこの検問所を通った。チャーリーは、通信用語の「C」のこと。つまり、チェックポイント・チャーリーなのだ。

現在は検問所の小さな施設が残るのみで、若いアメリカ兵と、この反対にはソ連兵の写真が写る大看板が立っている。看板がなければ見過ごしてしまうかもしれない。なにより驚いたのは、突然、ナチ時代を終え、分断時代を飛び越えて、冷戦の終焉が目の前に飛び込んできたことだ。テロのトポグラフィーをみて気分が落ち込んでいたせいもあるかもしれないが、とつぜん陽気な雰囲気に様変わりしたことに驚いた。このような意味で、ベルリンは本当にめまぐるしい。さっきまでナチ時代の真っただ中にいたのに、ほんの数歩足を進めれば別の時代の歴史に触れるのだ。それだけ、激動の歴史のなかにこの街があったということなのだろう。

観光客がたくさん！賑やかな観光地といった雰囲気。

かつての検問所周辺。更地の緩衝地帯がみえる。

USアーミー・チェックポイント→

⑭　アンハルト駅Anhalter bahnhof

アンハルト駅は、19世紀半ばにベルリンとアンハルト地方（現在のザクセン・アンハルト州）を結ぶ頭端駅として建てられた。1980年に完成したこの堂々たる威容の新駅舎の落成式には、時のヴィルヘルム1世と帝国宰相ビスマルクも同席した。アンハルト駅はベルリンを代表する長距離列車の駅となり、ドレスデン、フランクフルト、ミュンヘン、ウィーン、ローマ、アテネ方面へ向かう列車が続々とここを発着したという。汽車で来着する賓客はすべこの駅で迎えられたため、「カイザー・バーンホフ（皇帝駅）」の異名をとった。
戦時中には人的・物的輸送がなされる重要な駅であったこと、また戦前におけるベルリン最大の繁華街だったポツダム広場から目と鼻の距離にあったため、集中砲火を浴びてアンハルト駅は壊滅的な被害を受けた。戦後の混乱期は、応急処置をした上で数年間使用されていたが、1952年には完全に営業停止。1959年に正面のファサードの一部を残して爆破された。現在はこのファサードが残るのみである。
　残されたファサードだけを眺めるだけで、かつて壮麗な建物だったのだろうことを伺うことができた。壮麗な雰囲気を残すファサードを前にしたら、「どうせならば再建して使用すれば良かったのに」と営業停止を惜しむ気分にさせられた。しかしベルリンの分断が、アンハルト駅の地理的な重要性をなくしてしまったのだろう。東西国境、（1961年以降はベルリンの壁）が駅のすぐ近くに位置していたため、東ベルリンの周縁におかれてしまったのだ。このことは戦前までのアンハルト駅が持っていた、地理的な重要性を失わせたのだ。

左：1910年代の駅舎のようす。　右：現在唯一残っている、駅舎のファサード。

⑮　クーダムKU'DAMM

　ビスマルクがパリのシャンゼリゼを模して作ったクーダムは、全長3.5kmに及ぶ、旧西ベルリン最大のメインストリートである。今日一日、ずっと東ベルリンをみてまわったせいか、クーダムの景観はそれまでと異なる。それは蛍光灯で飾られた看板であったり、色使いのせいかもしれないが、アメリカ的な「開放感」がそこにはあった。これまでの町並みは灰色の石造りのたてものが重厚につづいていくといったか様子であったが、クーダムでは建物こそ石造りだけれども街を取り巻く空気が違う。こういったら言い過ぎだろうか。ベンツビルなどそれまでのベルリンには存在しなかった高層ビルが作られたもの、ここが最初である。

⑯　カイザー・ヴィルヘルム記念教会

　1881年に着工、1885年に落成。ロマネスク様式の教会。皇帝の権力の象徴として存在していた。1943年のベルリン大空襲で破壊されるが、そのまま修復されずに放置された。その後、空襲被害の証としてヒロシマの原爆ドームのように、そのままの姿での保存が取り決められた。1962年には隣に寄り添うように、現代建築の教会が建設された。
　外側は破壊されてはいても、内部の装飾は残されており、往年の荘厳な姿を想像させられた。教会内部は淡いピンクを基調とした美しい壁の模様も残されていた。現在の外見からは察しがつかないが、当時は皇帝の名を冠した教会にふさわしい華やかな教会であったのだろう。

隣接された現代建築の教会。内部は青いタイルに覆われており、その色彩が一層厳粛な雰囲気を作り出していた。

左右の写真は、
(http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%94%BB%E5%83%8F:Berlin_-_Kaiser_Wilhelm_Memorial_Church_-_inside_2.jpg)より。